

又-1

れ 疲

疲れたるわが身に
なほまつばれりうす
幸をゆめみる心

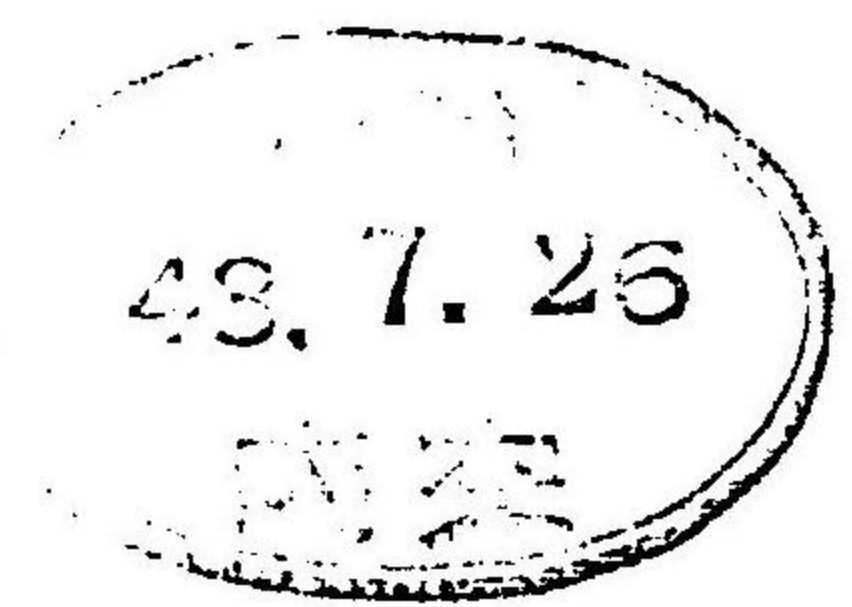
前田
夕暮

264
166

特52
390



前
田
夕
暮



○

友人及び少数の人々に頼りたいといふ希望で、此小冊子を隔月、或は三月に二冊位出すことにした。これはその第一集である。

こんな小冊子でも、このなかに収められてゐる歌には皆相當に葬ることの出来ぬメモリーがある。かすかながらも私の生命が脈搏つて居る。忘れぬことの出来ぬ悲しみがある。

明治四十三年七月十日

著者

疲れ

前田夕暮

このふたり熟れたる戀のさびしさに物づかれ
してあひすまひける

見のこしし夢をいだいて嫁ぎ來し女の夜のう
つくしさかな

しばらくは君一人の夫たらむ愛せよといへば
涙ぐみける

月見草咲きぬ涼しき添臥の夜のかさなりてや
や瘦せし妻

ぬぎすてし女の衣のくづれたる上にただよふ
たそがれのいろ

一株の黄なるダリヤに日ぞそそぐ疲れし人は
ややみだらなり

こころよく疲れてぬむる汝がそばにぬむられ
ぬ身のあかつきをまつ

泣くことのたへて久しき青春のをはりさびし
さ夫となりぬる

むしあつき女の部屋にちらばへる赤き色みる
なやましさかな

うまごやし花さきそめぬ小ひさなる家のある
じとなりしその頃

たへて來ぬ友のみだらの話さへ戀しうなりぬ
五月雨のふる

父よゆるせわかき二人は旅を好むわかき二人
は君を好まず

しづやかに夕餐をなせる妻の前わがままのち
さき心ただよふ

追はるるごと夫婦となりぬ麥の穂にかなしみ
おぼえ旅にいでけり

初夏の雨にぬれたるわが家のしろき名札のさ
びしかりけり

初夏の海光るなり大麥のかせのなかなる強き
くちづけ

夫となりてなにかさびしく物足らずあはれに
われを思ひいたりぬ

踏切の赤き灯みればあひびきの夜なりとこ
ろうそあまへする

ころよく肥えてゆく日の物づかれ六月のか
ぜやはらかう吹く

日ごと彼のあひびきをせし町はづれ野のひ
ともとの木に風青し

たやすくは別れがたなくなりしよりあはれさ
まして可愛ゆがりける

牛の肉煮ゆるにはひにむかふときわがさびし
さをしばし忘れつ

新らしき帽子の光り街上にゆきさきするみて悲
しみ淡し

ふとしたることに驚きやまざりし昨日のわれ
のいづくに行きしや

幸ひにつかれていつかうみそめぬ大麥の穂の
あからみにけり

こころよく味覺をそそろハムサラダふとおも
ひいづ六月の朝

數莖の麥の青きにかなしみのまつはりてあり
たそがれの部屋

やや肥えて言葉すくなになりにはけり眠をおも
ふ君がまなざし

まのあたり母をさいなむわが父のむごさをみ
なれおひたちにけり

栗の花しろくふるへて咲く日なり父よりうけ
し血ぞ身をせむる

やさしきより傷くるなし野にいでて汝をおも
ひ涙おとしぬ

ややあかくなりし帽子をかぶりけり野にいで
て麥の切株をみる

みじとする眼の前に来てさしのぞく顔あり妻
よ君知らざらむ

濁りたる空の下なる棕櫚の花黄に咲きこころ
慰む日なし

暗きかたへのみさまよひし魂のいとめづらか
に君をみまもる

都をばのがれて海に來し夜のやや肌さむみく
ちづけをする

こころよしやまひあがりのやや瘦せてふらん
ねるさし君をいだけば

264
166

花の夜

行發旬上月九

明治四十三年七月十九日印刷
明治四十三年七月廿三日發行

定價金七錢

製複許不

東京府下豊多摩郡大久保町西大久保二百一番地
著作兼 發行者 前田洋三
東京市豊島区三番町五十番地
印刷者 草木豊次郎

發行所

東京府下豊多摩郡大久保町西大久保二百一番地

白日社

疲れ終

機那煎のにはひただよふ蒸しあつき女の部屋
のすがれたる花
家もてと妻めとれども足らはざる心はつひに
足らはざりけり

264
166

花の夜

行發旬上月九

明治四十三年七月十九日印刷
明治四十三年七月廿三日發行

定價金七錢

製複許不

東京府下豊多摩郡大久保三番地
著作兼 發行者 前田洋三
東京市豊島区三番町五十番地
印刷者 草木豊次郎

發行所

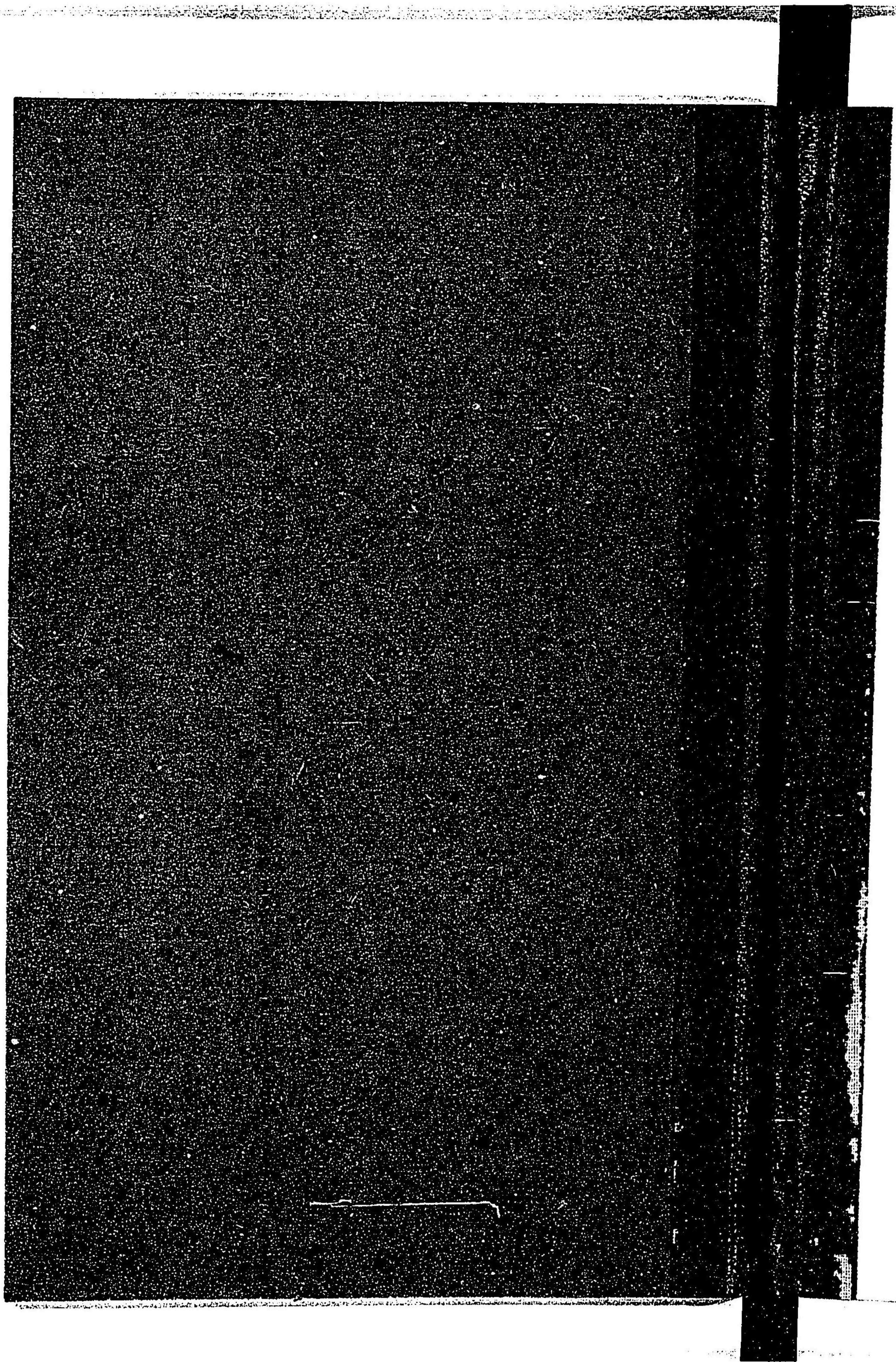
東京府下豊多摩郡大久保四番地
保村西大久保三番地

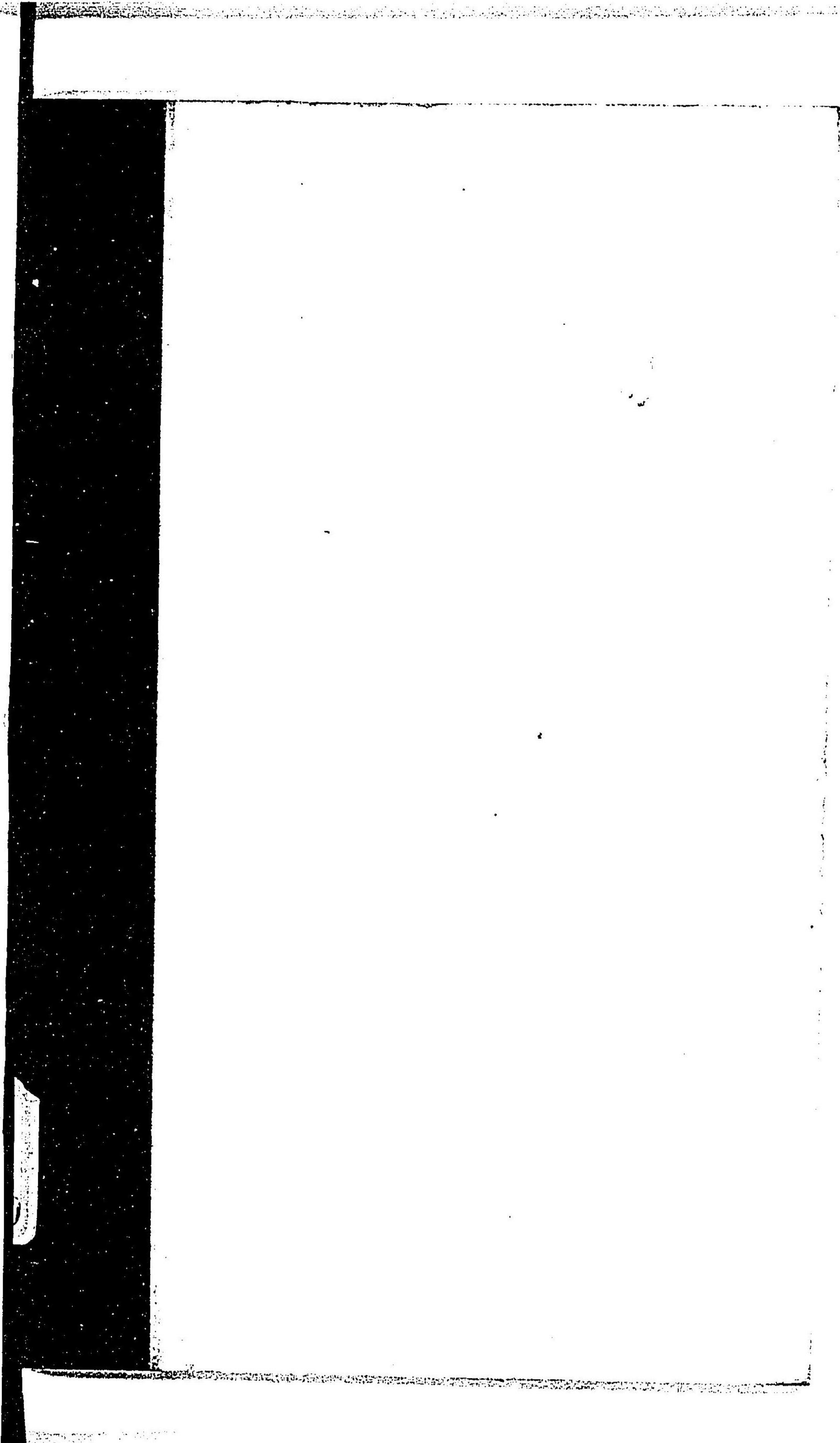
白日社

疲れ

機那煎のにはひただよふ蒸しあつき女の部屋
のすがれたる花
家もてと妻めとれども足らはざる心はつひに
足らはさうけり

X-1





1

疲れ

前田夕暮

国立国会図書館

086324-000-8

特52-390

疲れ

前田 夕暮/著

M43

DBD-1099



